

ライブストリーミングの視聴行動に対する期待の研究

小山 祐平

近年、ライブストリーミング（ライブ配信）が通信技術の進歩、新型コロナウイルス感染症による社会的な分断や在宅時間の増加により需要が急速に伸び、利用者が増加している。現在ではライブストリーミング専用のプラットフォームのみならず、動画共有サイトや複数の SNS がライブストリーミング機能を有するようになり、ライブストリーミングはエンターテインメントの新たな形式としての可能性を示している。

海外においてライブストリーミングはコミュニティ研究、メンタルヘルスや依存、ライブコマースなどと社会学、医学、経済学の幅広い分野において研究が盛んに行われているが、日本では基本的な利用実態調査しか行われていない。そのため本研究では今後日本でライブストリーミングの研究についてより幅広く研究していくために先の分野の研究における諸要素である期待に着目し研究を行った。先行研究からライブストリーミングを視聴する際の要因や視聴動機というものを視聴する際の期待として抽出し、期待に関する 8 要素「娯楽、社会的なつながり、視聴意向、感情的サポート、共同体意識、社会性、逃避、自己承認」と期待の形成に関わる 6 要因「視聴頻度、視聴時間、視聴ジャンル、聴衆規模、配信者の属性、視聴形態」との関係を明らかにし、日本においてライブストリーミングの視聴経験を持つ人がどの部分に期待しているのかを明らかにすることを目的とした。

調査はオンラインの質問紙で実施された。スクリーニング調査において 3000 名に対して一定の頻度（「月に 2、3 回程度」以上）で見ていると回答した人の中から、本調査において男女 150 名ずつに計 25 問回答してもらった。SPSS を用いて信頼性を検証し、クロス集計を取り、相関分析や t 検定などの分析を行った。

分析の結果、「視聴頻度、視聴ジャンル、配信者の属性、視聴中にする行動」の 4 項目について視聴する際の期待と一定の有意な差が見られた。1. 視聴頻度は娯楽、視聴意向、共同体意識、社会性、逃避の項目において弱い正の相関が見られた。2. 視聴ジャンルは雑談、ゲーム、音楽において有意な差が見られ、配信者の属性は公式チャンネル以外に有意な差が見られ、社会性の項目に対して多くの有意な差が出た。3. 視聴中にする行動ではコメントやチャット、ギフトを贈るグループの方がすべての項目において期待が高く出た。以上の結果より、次の考察が得られた。1. 視聴頻度ではコミュニティを親密にさせる社会性の項目や共同体意識の項目に有意な差が見られたため、長時間視聴しているよりも頻繁に視聴し、コミュニティに参加することにより期待が大きくなる。2. 配信者と視聴者間とで交流が多いとされるジャンルに有意差が見られ、社会性の要素が期待を大きくする上で重要である。3. 視聴中に何かしらの行動を取ることで視聴者や配信者との交流を増やし、視聴に対する期待が高まるが、自己承認や逃避の期待も高いため、依存症になるリスクも孕んでいる。

（指導教員 松林 麻実子）